

令和 4 年 6 月 20 日現在

機関番号：32401

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2020～2021

課題番号：20K21934

研究課題名（和文）現代ドイツにおける劇場環境の変化とドラマトゥルギーの相関性の解明

研究課題名（英文）Studies on the relationship between change in the situation of theatres and dramaturgy in Germany

研究代表者

横堀 応彦（Yokobori, Masahiko）

跡見学園女子大学・マネジメント学部・講師

研究者番号：40732483

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は現代ドイツにおける劇場環境の変化とそこで創作される舞台芸術作品のドラマトゥルギーとの相関関係を問うものである。研究期間中は海外渡航が困難であったため、オンラインを活用した調査を実施し、劇場やフェスティバルの共同製作によって生み出される舞台芸術作品のドラマトゥルギー分析を行った。本研究の成果は“Okada Toshiki & Japanese Theatre”（Performance Research Books, 2021）に掲載された論文に示すことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、舞台芸術作品のドラマトゥルギーの変容を劇場文化の変化と関連づけながら記述することを通して、演劇学と文化政策学の研究を有機的に統合する点にある。昨今の演劇では前例のないグローバルな地理的移動をともなう活動を行う芸術家が増えており、本研究の成果を英語論文として出版することで、国内外の演劇研究者および舞台芸術作品の作り手に還元し、劇場環境の発展に寄与する社会的意義を有している。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research project was to examine the correlation between changes in the theater environment in contemporary Germany and the dramaturgy of performing arts productions. Since it was difficult to travel abroad during the research period, I conducted an online survey to analyze the dramaturgy of performing arts productions co-produced by theaters and festivals. As a result of this research project, I was able to publish an essay in “Okada Toshiki & Japanese Theatre”（Performance Research Books, 2021）

研究分野：演劇学、文化政策学

キーワード：演劇 舞台芸術 ドイツ ドラマトゥルギー ドラマトゥルク 劇場環境 文化政策

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

本研究は現代ドイツにおける劇場環境の変化とそこで創作される舞台芸術作品のドラマトゥルギーとの相関関係を問うものである。近年、それぞれの観客に多様な作品解釈の可能性を持たせる緩やかなドラマトゥルギーによる作品が増えてきている。他方、1990年代以降のドイツにおいては250年以上の歴史を持つアンサンブル劇団としてのレパートリー型劇場に加えて、根無し草的なプロダクション型劇場の重要性が増している。本研究ではそれぞれの変化が互いに与え合う影響について文献調査や実地調査を通して分析し、現代ドイツ演劇における新しい傾向を明らかにすることを目指す。

### 2. 研究の目的

本研究ではドイツ国内における劇場環境の変化が舞台芸術作品のドラマトゥルギーの変容に及ぼす相関関係について事例研究を通して解明することを目的とする。研究代表者は過去に発表した論文において現在の劇場文化が「フェスティバル化」に向かっていることを指摘したが、従来フェスティバルが有していた特徴が劇場文化の中で日常的に観察できるようになっている。この変化は特にドイツ国内の劇場環境において顕著に見られることに着目する。

### 3. 研究の方法

本研究は(1)研究資料の整備、(2)調査対象の選定、(3)調査の実施、(4)ドラマトゥルギー分析、(5)研究成果の発表の手順を踏んで実施した。(1)研究資料の整備については、ドイツ演劇に関連する図書および映像資料を収集したほか、本研究で扱うテーマが同時代的問題に関連することから批評理論や思想一般にかかわる欧米並びに日本の資料を広く収集した。(2)調査対象の選定については、研究代表者が研究開始前から訪問し劇場関係者との協力関係を確認しているミュンヘン・カンマーシュピーレ劇場他を候補とした。(3)調査の実施については、事例研究対象とするドイツ国内の複数の劇場を訪問して劇場環境及び創作プロセスに関する実地調査を行う計画を立てていたが、新型コロナウイルス感染症の影響により海外渡航が困難となったため文献調査およびオンラインを活用した調査に切り替えて実施した。(4)ドラマトゥルギー分析については、文献調査やインタビュー調査を経て、創作プロセスの変化が舞台芸術作品のドラマトゥルギーに与えている相関関係について比較分析を行った。(5)研究成果の発表については、研究代表者が所属する学会での研究発表を行い、そこで国内外の専門家から得たフィードバックをもとに学術論文を執筆した。

### 4. 研究成果

演劇の本質や方法に関する理論の総称であるドラマトゥルギー (Dramaturgie) という語は、レッシングが『ハンプルク演劇論』を著した1767年のハンプルクを歴史的起源とし、長くドイツ語圏演劇の代名詞のように見なされてきた。ところが今やドラマトゥルギーという語は演劇のみならず、ダンスやオペラ、サーカスに対しても用いられるようになり、領域横断的、流動的

なものになっている。この変化についてマリアンヌ・ファン・ケルクホーフェンは、ブレヒト以来ドイツ演劇において流行しているドラマトゥルギーの形、すなわち稽古開始前に演出家とドラマトゥルギーを担当する職能であるドラマトゥルク (Dramaturg) が解釈のコンセプトを作り上げる従来の作業哲学を「コンセプトのドラマトゥルギー」と呼び、それに対して演出家や振付家が色々な素材を用意した上で、稽古のプロセスにおいてドラマトゥルクと協働しながら制作するタイプの作業哲学を「プロセスのドラマトゥルギー」と呼んでいる。

これまで研究代表者は「プロセスのドラマトゥルギー」論を手がかりとしながら、主に個々の作品内部のドラマトゥルギーを分析する研究に取り組んできたが、経過観察を進める中で作品創作を取り巻く外部の劇場環境が舞台芸術作品のドラマトゥルギーに影響を与えている事例の増加傾向を確認した。本研究課題の主たる問題意識はこのようなドラマトゥルギーの変容を劇場文化の変化と関連づけながら記述することにある。研究期間中は海外渡航が困難であったため、オンラインを活用した調査を実施し、劇場やフェスティバルの共同製作によって生み出される舞台芸術作品のドラマトゥルギー分析を行った。

2020年度は本研究の準備段階として位置づけ、ドイツと日本の劇場環境を比較分析する上での基礎的研究として日本における創作プロセスとドラマトゥルギーの関係についての論文「劇場がオペラをつくる 東京芸術劇場シアターオペラの事例から」を執筆した。日本におけるオペラ制作は長い間二期会や藤原歌劇団をはじめとするオペラ団体が制作主体を担ってきたが、1990年後半には新国立劇場やびわ湖ホールなど本格的なオペラ制作が可能な設備を有する公立劇場が開場し、その後文化庁が「優れた劇場・音楽堂からの創造発信事業」を開始した2010年前後より複数の公立劇場がオペラを共同制作する事例が増加している。同論文では近年の日本のオペラ制作形態における多様化について論じた後、研究代表者自身が創作プロセスに関わっていた東京芸術劇場シアターオペラシリーズを事例として参照しながら、日本の公立劇場におけるオペラ制作の課題について検討した。

2021年度は日本演劇学会全国大会において「共同製作のドラマトゥルギー 現代ドイツにおける劇場環境の変化に関する一考察」と題した研究発表を行い、国内の演劇研究者と議論を行った。ドイツ語圏で毎年上演された作品のうち注目すべき10作品が選ばれるベルリン演劇祭テアートルレップェンにおいて、従来はレパートリー型の公立劇場が単独で制作した作品が選出されることが殆どであった。ところが2010年代以降、複数の公立劇場、プロダクション型劇場、フェスティバル、アーティストが独立して運営するカンパニーによって共同製作 (Koproduktion) された作品の選出が増加しており、特に2019年以降は毎年3作品以上が共同製作によるものである。同発表では、このような選出傾向の変化を手がかりとして現代ドイツにおける劇場環境の変化を考察し、共同製作によって生み出される作品のドラマトゥルギーを特にリミニ・プロトコル『リモートX』(2013年初演)を事例として分析した。

以上の研究成果の集大成として、日本とドイツの両国で精力的に舞台芸術作品を発表する演劇作家・岡田利規の活動に着目し、両国での創作環境の違いや岡田作品のドラマトゥルギーについて論じた英語論文「Who knows we want to be an international artist?」Producing Okada Toshiki's theatre and the international sceneを執筆した。同論文は英国のPerformance Research出版による専門書『Okada Toshiki & Japanese Theatre (岡田利規と日本演劇)』に収録され出版された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Masahiko Yokobori	4. 巻 N/A
2. 論文標題 'Who knows we want to be an international artist?' Producing Okada Toshiki 's theatre and the international scene	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Okada Toshiki & Japanese Theatre	6. 最初と最後の頁 119-127
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 横堀応彦	4. 巻 31
2. 論文標題 劇場がオペラをつくる 東京芸術劇場シアターオペラの事例から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 跡見学園女子大学マネジメント学部紀要	6. 最初と最後の頁 69-89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 横堀応彦
2. 発表標題 共同製作のドラマトゥルギー 現代ドイツにおける劇場環境の変化に関する一考察
3. 学会等名 日本演劇学会 2021年度全国大会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------